方向

第九〇号　一九八八年一〇月二〇日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

慶　清　朝

－李清照（四七）－　1988.10.5.

原田憲雄

禁幄低張，　幕を張り
彫欄巧護，　朱欄で囲い
就中独占残春。　ことに独り占めする残んの春
容華淡竚，　ほんのりしたのも
綽約倶見天真。　なよなよしたのも　とっても自然
待得蕚花過後，　花々の盛りの過ぎたそのあとで
一番風露暁妝新。　ひと露うけた　暁のよそおいの新鮮さ
妖嬈艶態，　あだっぽく
妬風笑月，　風に妬ませ　月を笑ませ
長帯東君。　春の神をなやませる
東城辺，　都の東

南陌上，　　南大路
正日烘池館，　　ほてるばかりの池辺　やかたに
競走香輪。　　あらそって車走らす
綺筵散日，　　品定めつぎつぎ進み
誰人可繼芳塵。　　どこが最後になるでしょう
更好明光宮殿，　　それはもう　明光宮の御殿です
幾枝先近日辺匂。　　幾枝が　まずお日さまのあたりで匂うかしら
金尊倒，　　樽が倒れ
拚了尽燭，　　かがり火の尽きるまで
不管黄昏。　　黄昏もおかまいなしに

調名は「慶清朝慢」ともいう。慢とは長いというほどの意。字数が多く、歌う調子も緩やかなのを指す。双調、九十七字、前後段各十句、四平韻。

ここでいう花は、たぶん牡丹である。芍薬という説もあるが、そうではあるまい。牡丹は、六朝の文献に初めて現れ、八世紀、唐の玄宗の開元中、都の長安で流行し、以来中国人の最も愛する花となった。十一、二世紀、宋の洛陽では、皇帝から庶民にいたるまで牡丹の栽培に熱心で、貴族、豪族は万金を投じて名花を入手しようと狂奔した。花の咲く頃には到る処で花見の宴があり、批評しあい、豪華絢爛を競った。この詞はそれを歌った。

幕をまわし
朱欄で囲い
ことに独り占めする残んの春

禁幄とは、禁中すなわち皇帝の宮殿の幕。またはそのように立派な幕。、ここでは後者。禁は飾り言葉として使っている。朱欄と訳したものもやはり飾り言葉で実際に赤いものと固執しなくていい。欄は垣根。牡丹は乾燥した処でないといけないが、激しい風や、きつい陽ざしには弱いので、幕を張った垣根で守る。牡丹はそのように大切にされながら晩春の最後の人気を独占する。晩唐の詩人呉融が「僧舎の牡丹」という詩に「春残ひとり羣芳に殿りす」とうたってから、この花はことに春の最後を飾る女王となった。

ほんのりしたのも
なよなよしたのも　とっても自然

牡丹には、またさまざまの種類があり、その容華、かおかたちの、淡竚、ほんのりとたたずむようなのや、綽約、なよなよしたのもあるが、いずれも天真、自然でうつくしい。淡竚は、淡泞の誤りだろうという説がある。それならただ、ほんのり、の意。なよなよと訳した綽約は、『荘子』に出てくる仙山の神女の形容として有名である。天真は生れたままの自然さで、玄宗皇帝が梅妃のためにうたったと伝える詩に「おしろいをつけずうまれたままの自然さだ」の句がある。李清照はそれらの古典を、ここの牡丹のイメージにとりこんでいる。

花々の盛りを過ぎたそのあとで

ひと露うけた　暁のよそおいの新鮮さ

ほんのりしたのも、なよなよしたのも、それぞれによく、一切の花々がさまざまの特色をふりまいて過ぎた後のある朝、露をあび風にそよいで、いっぱいに咲き出た牡丹いろの大輪の牡丹のすばらしさ、新鮮さ。

あだっぽく

風に妬ませ　月を笑ませ

春の神をなやませる

さきの玄宗皇帝の後宮でいえば、武恵妃も、梅妃も、その他の妃たちもそれぞれに美しく、皇帝の心をとらえたろうが、最後にあらわれた楊貴妃が、さきのすべての妃たちの美しさを打ち消して、絢爛豪華に宮廷に照り輝いた趣きである。以上前段は、牡丹の美しさを、花を中心に描いた。後段は、花を愛でる人々にフットライトをあてる。

都の東

南大路

ほてるばかりの池辺　やかたに

あらそって車走らす

朝からよい天気。都の東の郊外にも、南の大路あたりの池や館のあるあたりは、どこも牡丹の花見の宴がくりひろげられ、暑いばかりに日の照る道を、美々しい馬車がひっきりなしに走る。

品定めつぎつぎ進み
どこが最後になるでしょう

牡丹のコンクールはだんだんすすみ、品定めの終わったところから、花見の宴席はつぎつぎおひらきになってゆく。花の批評家たちの馬車を、最後にうけいれるのは誰だろう。

それはもう　明光宮の御殿です
幾枝が　まずお日さまのあたりで匂うかしら

明光宮は、漢の武帝が建てた宮殿で、以来、皇帝の宮殿の代用詞となった。牡丹の最も優れたものを集めているのも皇帝であり、花見の宴の最も豪華なのは、その宮殿で開かれるものだ。

参会者がそろうと皇帝が姿をあらわす。さてそのとき、どの花が、まず皇帝の目をひくだろう。

樽が倒れ
かがり火の尽きるまで
黄昏もおかまいなしに

コンクールは、いうまでもなく、ひと露うけてあだっぽく輝いたあの花に冠をおくり、うたげは皇帝と、牡丹よりたおやかな皇帝の愛人を中心に、進められ、やがて無礼講となり、酒の樽が倒れ、かがり火の尽きるまで、その宴はやみそうにない。たそがれがせまり、やがて夜になるのもおかまいなしに。

玄宗皇帝が、牡丹の咲きほこる宮中の園庭で、牡丹より艶っぽい楊貴妃とうたげを楽しんだのは、唐朝廷の絶

頂で、その直後に安禄山の変が起こり、時代は戦乱にまきこまれる。それからざっと三百年たった。李清照の生きる宋代もその絶頂にあり、ひとびとは牡丹を愛し、春の終りには唐代におとらぬ花見が盛んだった。だが、また、たちまち時代は戦乱に転落する。李清照がこの詞を作ったのは、戦乱の前で、彼女自身はそんな花見を楽しみ、近付きつつある不幸に気もつかなかっただろうが、「慶清朝」清らかな朝廷を祝う、という調名さえ反語となり、この詞そのものが、諷喩詩としてつくられたと見られそうな予言性を帯びてしまった。

中國藝文研究會『嵐子　林』一―一〇　1988.10.11.　原田憲雄

本誌は一九八三年一月創刊、一九八八年三月第一〇号を発行した。白川静氏の「創刊の辞」にいう。

「學林」は、立命館大學文學部中國文學專攻の卒業生とその同志をもって組織する、中國藝文研究會の機關誌として刊行する。さしあたっては、年刊の計畫である。／いま文學部は、「立命館文學」發刊當時に比して、その規模は十數倍に及んでいる。そのため發表機關の不足は覆いがたい事實であるが、その急速な充實は期待しがたい事情にある。多數の卒業生が、安んじて研究し、發表しうる機關は、何も用意されていないのである。／しかしもともと、学術の研究は、自己の内的な要求に發するものであり、そのための條件を他に俟つべきものではない。すでに志があるならば、ことは果敢に行なうべきである。……

この言葉は、己の志を果敢に行なってきた人のものであるだけに、読む者を感奮させずにはおかぬ。氏の教えを受けてきた人たちにはなおさらであろう。年刊の予定が、半年刊として推し進められ、九号から一〇号までは

一年たっているが、それは一〇号に二号分の頁を当てるためだったようだ。

第一〇号の巻末に既刊総目を掲げ、上古から現代にいたる各時代についての研究があるのは、当然といえば当然だが、研究者の少ないグループではむつかしい。注目すべきは、原俊樹「中国文献資料による東アフリカ沿革史試論」マリヤ・レイナ・リィヒィラ「ヒンズー社会における浄不浄の観念」のようなアジヤ・アフリカ関係の論考をも収めることで、「中国」にこだわらないところがはなはだ好もしい。こんなことをいうこと自体アナクロニズムだが。

大学の紀要や論叢には、研究費をもらうため、あるいは、もらったために仕方なしにでっちあげたとしか思えない文章が載っていることがあり、情けなくなるが、この雑誌の論文は「自己の内的な要求に発するもの」ばかりで、それぞれの説に賛成できるかどうかはともかく、読んで気持よく、学ぶべきことが多い。

一〇号のうち、白川氏が創刊の辞だけなのは、会員の執筆を促すためであろう。松本幸男氏一〇回、清水凱夫・中森健二氏八回、芳村弘道氏六回、谷口義介氏五回、道上克哉・今場正美・萩原正樹氏が四回、斎藤功・奥村家造・笠川直樹・原俊樹氏が二回、小林靖幸・范月嬌・朱一星・リィヒィラ氏が一回で、現職教授会員の活躍はさすがである。

わたしは会員の二、三の方を知るだけで、立命館大学についてはほとんど何も知らないが、中国文学の専攻者は毎年数十名と聞く。卒業してそのすべてが中国関係の学問に携わるはずはなく、それでよいのだが、大学院を修了したひとでこの雑誌に執筆していないひと、一、二度書いたがそれきりになっているひともあろう。すべて

のひとが執筆すれば、この雑誌でも紙数が足りないだろう。だが、せっかく志した道だから、それぞれのひとがこの雑誌以外にも、発表機関を作って活躍してほしい。

白川氏が、戦前からずっと手書きガリバンで作業を発表してこられたのは有名過ぎるくらいだが、松本氏も、本誌以外に、手書きの原稿をコピーして同好に頒布しておられる。本誌第一〇号の「陶淵明の生涯と作品」はそのようにして先に小部数発表されたものだった。掲載論文の一々についてわたしが拙い紹介をしなくても、この雑誌そのものが、すでに学界だけでなく、ひろく世間のひとたちにも求められていると聞くから、やがてさまざまに討論されるだろう。

戦前・戦後のある時期までは、乏しい費用で発表するには手書きガリバンしかなかったが、今日では、ワードプロセッサー（以下、ワープロと簡称する）やコピー用具の進歩がめざましい。それこそやる気になれば、雑誌を出すくらいなんでもない。いま記しつつあるこの文章はワープロで打っている。はじめの白川氏の文の、學、國、藝などの繁体字は、三年前にはワープロでは打てなかったが、いまでは大抵の機械でうてる。研は、わたしの印刷機では違いがはっきり出てくれまいと思うが、当用漢字の研を修正して繁体字としたものである。無い文字は作ればよく、喉、昉、梟、拚、釭、彤などは必要に応じてつくったもの。恵、予、神、阝、真、手、歹、尭などはすでにある文字のヘンやツクリを削ったもの、二度打ちすればワープロにない文字も使えることになる。サンスクリットのローマナイズで āśṇṃḥī などの ¯ ´ ˙ ˙ の符号や、中国語の四声を示す ¯ ´ ˇ ˋ の符号も簡単に作れる。上手か下手かは努力次第。

こういう作業は、面倒でないことはない。しかし手書きガリバンで原紙をやぶったり、インクが出なかったり、といった苦労にくらべれば、ワープロで文字を作る面倒なんぞは、面倒のうちにも入るまい。発表機関がない、という理由は成り立たなくなった。発表したい意見があるなら、ワープロで打ってもよく、原稿をコピーしてもよく、もちろん手書きガリバンをさらに愛用しても悪くない。それでは体裁がよくない。といった声も出ようが、中国では銭鍾書先生の『管錐編』できえわら半紙に刷って刊行されている。贅沢な本にそれほどでもないことを書き付けるほうがかえってはずかしい。わたしのような怠け者が人さまにあれこれ申すことはできないけれど、白川氏の「志があるならば、ことは果敢に行なうべきである。」という言葉は、真実だと思う。

1988.10.12.　原田憲雄

望断・猜道・奴面

前号の拙稿「点絳脣」につき、三浦国雄氏が、望断帰来路の「望断」は「のぞみたゆ」ではなく「眺めつくす」意ではないか、と教えられた。そのとおりで、拙訳は誤りだった。とりあえず後段を「欄干によれば／あはれただ　つれなきのみぞ／ひといづこ／天につらなる草はらに／眺めつくす　帰ります路」と改める。本誌第三八号「減字木蘭花」の後段「怕郎猜道　奴面不如花面好」につき、荒井健氏が、「道」は助字、「奴」は一人称と解するのが普通、と教えられたことは第四〇号で報告した。「奴」は、『宋書』王華伝に二人称とみられる使用例があるので、あれこれ考えていたが、やはり荒井氏の教えに従うべきであろう。上掲二句は「あのひとは思うかも／わたしの顔が花の顔ほどよくないと」と改訳すればよかろうか。ご教示、うれしく、感謝いたします。

滝の上の国

1988.10.5.　原田慶

子どもの頃に住んでいた村では、わたしのの家から滝まで行くのに、途中にぽつんと一軒、綿屋があって、それが村のいちばんおしまいの家だった。あとは田んぼばっかりで、山がせまってくると棚田になり、山間を通って滝に出る。そこからはまだずっと道が続いて向うへ消えている。滝までは家から一キロ半くらいだったと思う。

わたしは滝を越して向うへは行ったことがなかった。滝が道の反対側の吾妻川へ流れ下る橋の上に立って、水の落ちるのをひとしきり眺めて、必ずそこから引き返した。滝では明るかったのに、歩いて帰るうちに暗くなる。綿屋のところまで来るとほっとする。家まではまだ少し田が続いているが、村の灯が点々と見え、綿屋の水車はまだまわっていた。夫婦は急ぎの綿打ちの仕事をしているのだ。子どものない家だからいつも静かで、水車の音だけが聞こえてくる。古くて大きな水車は苔をいっぱいつけ、あおい藻がとろとろと水をしたたらせて重そうにまわっていた。ひっそりした大人の家は、子どもには気むずかしく感じられて、庭に咲くバラやケシの花までが入ってはいけないよと言っているように思われた。一度だけ母について行って、水車や、山から来る水や、綿打ちの仕事を見たことがあった。

そんなよそよそしい家の灯でも、日暮れの帰り道には、ほっと一息つかせてくれる。

妹や弟をきそって、ほんとうにたびたび、滝を見に行った。途中で、材木や炭を運んできて帰る空の馬車が、わたし達を追い抜いて行くと、そっと小走りについて行って、荷台にぱっと飛びつく。しばらくすると馬方が振

り向いて「こら、あぶないぞ」と言う。あわてて飛び降りるが、もう一度見えないようにかがんで走って行ってまた飛びつく。しばらく行くとまた叱られる。飛び降りて仕方なく歩き始めると、みるみるうちに馬車は遠ざかって行く。

時には、どこかの畑へ寄って、ニンジンを引き抜いて溝で洗い、かじりながら歩いて行く。だれかに教わったことだろう。ニンジンの生は、くせのあるにおいがするが、馴れれば甘くておいしい。

滝に着くと、何もかも忘れて流れ落ちる水に見とれている。名もない滝だけれども、子どもには高くて大きな滝に思えた。水が黒く見えたり白く見えたりし、その量が変化するように見える。同じように落ちているはずの水が、必ずしも同じ所へ落ちないのは何故だろう。すこしずつ位置を変えて落ちて、高く飛び上がったり、びしゃっと流れて跳ね上がらなかったりするのはどうしてだろう。

わたしは学校へ入ったばかりの頃、学校が好きでなかった。ずっと自由に野や川原で遊び続けていたのに、突然、思うままにできない学校という所に閉じ込められた時には、ずいぶんがっかりした。帰りたい時に帰れない、行きたい時に行きたい所へ行けない、こんな不自由な思いをしたのは生れて初めてだった。学校などは行かないと断われば良かったのに、どうして行くことを承知してしまったのかと悔やしくて仕方がなかった。その時の悲しさは今でもそのまま思い出すことができる。

しかし学校はつまらないことばかりではなかった。不思議な話をいくつもならったのである。イザナギ・イザナミの国生みの話は、どこかに全く別の世界があるような気がした。神話をいくつか聞くことで、それはわたし

の心で、ふくらみ、存在感をもってきた。そしてその世界が、滝の上にあるのではないかと考えるようになっていった。

ヤマタノオロチという話では、スサノヲノミコトが、八つの瓶に酒を入れて、それを飲んで酔っぱらったオロチを退治した。その知恵に感心したが、わたしがもっと心ひかれたのは、川に箸が流れてきたので、川上に人が住んでいると思って、川に沿って上って行ったということである。わたしの父の知り合いの家が、山の中の小さな村にあり、その家の横を、山から来る美しい水がたっぷりと、どんどん流れていた。その家の人たちは台所の物をすべてその川で洗い、おばあさんは、夏になると川の傍に座って、御飯に川の水をかけて食べる。川に箸が流れてきたので川上に人が住んでいると思ったというのは、わたしには大変に納得できることだった。

滝の前で水を見ていても、箸は流れて来なかった。それでも、この滝の上には明るくて広々とした、静かな村があると思った。滝のどこを見ても登れるような所はない。スサノヲノミコトは、姉のアマテラスオオミカミに追いはらわれて、出雲の肥河の上流、鳥髪という所に降りてきた。この時、その川に箸が流れてきたのだという。

父神イザナギノミコトに「汝がミコトは、海原をしろしめせ」と命令されて「吾は、ははの国ねの堅州国にまからんとおもう」とスサノヲノミコトはわあわあ泣いた。「その泣きたまふ状は、青山を枯山なす泣き枯らし、河海はことごとに泣き乾しき」と書かれている。この嘆きようはどうだろう。

今、となりの家に小さな兄弟がいて、毎日のように二人が泣き枯らすのを聞いてきた。今年から兄の方が保育園に行くようになり、すこし静まった。二人ともよほど自己主張の強い子どもなのだろう。ひとの泣く声を聞く

のは、その嘆きが聞く者の心にも入ってきて、つらいものである。

滝の上の、どこまでもひらけた明るい村へ、いつか行こうとわたしは考えていた。滝を登ることはできないが、このみちを橋のずっとむこうまで行けば、上の村へ行ける道があるにちがいない、馬車のおじさんに頼んでそこまで乗せて行ってもらおう・そこからは一人でどんなことをしても滝の上の村をさがしてみせる。行ったら多分もう帰って来られない。だから誰にも話さなかった。

そんな考えを実行しないうちに、わたし達一家は村を離れてしまったので、自分でつくりあげた世界へ行く機会を失ってしまった。滝の上がどういう所なのか、今でもわたしは知らない。地図で調べても、それがずっと白根山の方へ続く山地であるということしかわからない。ただ子どもの頃の思いはそのまま残っていて、本当にそんな村があったように思い込んでいた。どこまでも広く、明るくて静かな国、それはどこかにある。子どもの頃からずっと、そこへ行こうとしてわたしは歩いて来たのかもしれない。そう思ったら急に背中が軽くなるような気がした。

Dance Party in KYOTO

1988.10.10. 原田 慶

友人のUさんにダンス・パーティーの入場券をもらった。毛虫の舞踏会に感心していたけれど、人間の舞踏会は見たことがない。百聞一見にしかずというから、行ってみようと思った。最近はいわゆる社交ダンスというの

がずいぶん盛んなようで、Uさんは病気の後、健康回復のため習っているのである。

さて出かけようと思ったら、そんな席に着てゆく服がなかった。いつものブラウスで、胸に小さな花をつけて、イヤリングをして、まあこれで雰囲気は出るだろう、しかし靴がない。いつものウォーキングシューズをはいて、せっかくイヤリングまでつけたのになあと思いながら自転車で走って行った。こんな時は、馬車かオープンカーででも行くとかっこいいのだが、私はお姫様でも貴婦人でもない。

御所の傍らのKBS京都ホールだから、場所はよく知っている。外に自転車を止めて、受付に行った。そんなにじろじろと眺めたりせずに「いらっしゃいませ、どうぞ」と言って入れてくれた。入場券があるのだからあたりまえである。あまり人目につかないようにと思って、急いでホールへすべり込んだら、中は暗くて、中央の広い床の上できらきら光るドレスの人と黒いタキシードの人が、タンゴを踊っていた。まわりにたくさんの人が立って見ている。椅子も少し置いてある。ああこれならウォーキングシューズでも見えないなと安心して、人の間からのぞいてみた。

タンゴというのは、時々首をクックッと人形のように動かして止めるのが特徴で、いかにも緊張して踊っているような、リズミカルなものである。少しぽきぽきした感じのタンゴに比べると、ワルツはなめらかで見ていても楽しい。空色や濃い青、ピンク、赤、純白などのぴったりと身にあったドレス、ふさふさとした羽毛のような飾りや光る物を縫いつけ、靴も、青や赤や金銀のヒール。なんと美しい、やっぱり毛虫よりずっときれい。

あんなにながいドレスを着て、男の人と二人で組んで、どっちも裾を踏んだりしないでするすると踊る。あん

なのが踊れたら気持いいやろなあと思う。そやけどわたしにはとってもできんわと思う。だいたい田舎の盆踊りでも、「棒杭が踊っているみたいで恥ずかしいさかい、あんたは踊らんとき」と母が言ったくらいのものだ。妹は日本舞踊を習っていて、盆踊りでも目立つほどしなやかに踊る。何をしても妹の方が私より上手なことは、今でも変わらない。子どもの頃にはくやしい思いもしたが、最近は、私のぶんまで頑張ってくれていると思って感謝している。

「わたしなんにもようせんけど、妹は、お茶にお花、着物の着付けも教えていて、忙しく飛びまわってるんえ」などと、自分のできないことは妹を引っぱり出してすましておく。

きちんと主婦業をこなしているのもいれば、大胆に放っぽり出して勤めに出ているのもある。それぞれだが、姉妹はいい。みんな凡才だから、互いに無いものを補いあっている。

照明が消えて暗くなったと思ったら、天井から吊り下げた、こまかくカットされて面のたくさんある丸いガラス体がゆっくりまわり出し、中に入っている色電球で、ホール全体にきらきらと星屑をまいたような光りが舞い出した。青いタキシードのバンドマンがドラムのバチをカチカチと打ち合わせて拍子をとり、日本語では「恋心」という題で、岸洋子がうたっていた曲が流れ出した。サクソホンの音で、他に目立った楽器はない。

恋は不思議ね　　消えたはずの
灰の中から　　なぜに燃える
ときめく心　　せつない胸

わかれをつげた　　ふたりなのに
恋なんて　　空しいものね
恋なんて　　なんになるの

今までまわりで見ていた人が、みんな中へ入って、踊り出した。ぎっしりいっぱいの人である。ほとんどが中年から上の年齢で、笑ったりしゃべったり、楽しそうな人もあるし、案外つまらなそうな顔をしている人もいる。若い青年が母親のような人のパートナーをつとめているのも見える。ワルツ、タンゴ、ルンバなど聞いたことのある曲が続いて再びホールが明るくなった。

次に赤いドレスの人と黒いスーツの人が五組ほど出て来てタンゴを踊った。私の前にいてビデオカメラを廻していた人も踊っていた。この人達は若者ばかりのグループで、ドレスがとてもよく似合っていた。そのあと夫婦でサンバを踊った人があった。二人とも黒にたくさん刺繍のある闘牛士のような服装で、情熱的な踊りだった。これは本当にじょうずだった。よほど踊りの好きな人達らしい。

十一時三十分から始まったのだけれど、私は十二時半頃に来て、一時間余り見たら疲れてしまった。自分は踊れないのだから、じっと立っているのは疲れる。みんなきれいだけれど、どれも同じにしか思えなくて、退屈してしまう。まだ三時間以上続くのだから、いろいろなことがあるのだろうと思ったがしんぼうできなくて、受付を出ようとしたら、外出証というのをもらった。

そのまま家に帰って「まだ三時間もあるので、外出証を見せて入ればよいから、行ってきはったらどうですか」

と主人に言ったが、「いや、もういらん。この年になって踊ったら神経痛が出て、動けんようになる」と笑った。彼はなんと、若い頃にはダンサー志望のかっこいい青年でもあったらしい。私などかっこよかったことは、いっぺんもない。それでも踊れたらやっぱり楽しいだろうなあと思って、ちょっと寂しいような複雑な気持でため息が出た。

金色のユーパ

―法華経巡礼　22―　　1988.10.16.　原田憲雄

以下は文殊の、弥勒たちへの答えを更に詩（偈・頌）として重ねて歌ったもの。だから重頌（じゅうじゅ）という。重ねて歌った形式にはなっているが、成立からいえば散文の部分（長行、じょうごう）より古いのが一般であり、偈にあって長行にないものがあり、長行にあって偈にないものがある。その有無を分析するのが成立史研究の大切な方法になっていて、思想の発展を知るための鍵でもある。歴史的な見方が経典を読む唯一の方法でないことはいうまでもないが、ともかく、重複しているからといっておろそかにはできない。

1.48. 過去の時を想い起こす、不可思議で、はかりしれない劫のむかし、
ジナがいた、人間の中の最高者、日月燈明という名であった。（57）
妙法を説き、人間の導師は、衆生の無量幾千万を教化して、
勧めたのだ、はかりしれぬ多くのボサツに、無上の仏の智慧に向かえと。（58）

八人の子があった、まだわかかったあの指導者に。
かれらは大ムニの出家を見、愛欲を捨て、すぐきますべて出家した。（５９）
法を説いた、世間の主は、すぐれた「無量の教え」、経典の
広大と名づけるものを、説きあかした、幾千万の衆生のために。（６０）
語り終わったその刹那、導師は安坐し、その法座で、
すぐれた「無量の教え」という三昧に入った、最高のムニは。（６１）
天上のマーンダーラヴァ花の雨が降り、打ちもせぬのに太鼓が響き、
天やヤクシャが虚空に現れ、供養した、両足の尊い方に。（６２）
その刹那、すべての国土が震動し、奇異未曾有なことが起こった、
光がひとすじ放たれたのだ、導師の眉間の中央から、美しく。（６３）
東の方に光は進み、一万八千の国土に満ち、
すべての世間を照りかがやかせ、衆生の生死を指し示す。（６４）
その国土には、宝玉造りのものがあり、瑠璃色に輝くものがあり、
燦爛とすばらしく見えた、導師の光に照らし出されて。（６５）
そこには天、人、竜、ヤクシャ、ガンダルヴァ、アプサラス、キンナラたち、
スガタへの奉仕に励む人たちが、諸世界で供養するのが見渡せた。（６６）

atītam adhvānam anusmarāmi acintiye aparimitasmi kalpe /

yadā jino āsi prajāna uttamaś candrasya sūryasya pradīpa nama //57//

saddharma deśeti prajāna nāyako vineti sattvāna ananta-koṭyaḥ /

samādapeti bahu-bodhisattvān acintiyān uttami buddhajñane //58//

ye cāṣṭa putrās tada tasya āsan kumārabhūtasya vināyakasya /

dṛṣṭvā ca taṃ pravrajitaṃ mahāmuniṃ jahitva kāmāṃl laghu sarvi prāvrajan //59//

dharmaṃ ca so bhāṣati lokanātho ananta-nirdeśa-varaṃ ti sūtram /

nāmena vaipulyam idaṃ pravucyati prakāśayī prāṇi-sahasra-koṭinām //60//

samanantaraṃ bhāṣiya so vināyakaḥ paryaṅka bandhitvā kṣaṇasmi tasmin /

ananta-nirdeśa-varaṃ samādhiṃ dharmāsanastho muniśreṣṭha dhyāyī //61//

divyaṃ ca māndāravavarṣam āsīd aghaṭṭitā dundubhayaś ca neduḥ /

devāś ca yakśāś ca sthitāntarīkṣe kurvanti pūjāṃ dvipadottamasya //62//

sarvaṃ ca kṣetraṃ pracacāla tatkṣaṇam āścaryam abhyadbhutam āsi tac ca /

raśmiṃ ca ekāṃ pramumoca nāyako bhruvāntarāt tām atidarśanīyāṃ //63//

pūrvāṃ ca gatvā diśa sā hi raśmir aṣṭadaśa-kṣetra-sahasra-pūrṇā /

prabhāsayaṃ bhrājati sarva-lokaṃ darśeti sattvāna cyutopapādaṃ //64//

ratnā-mayā kṣetra tathātra kecid vaidūrya-nirbhāsa tathaiva kecit /
dṛśyanti citrā atidarśanīya raśmi-prabhāsena vināyakasya //65//
devā manuṣyās tatha nāga-yakṣa gandharva tatrāpsara-kiṃnarāś ca /
ye cābhiyuktāḥ sugatasya pūjayā dṛśyanti pujenti ca lokadhātuṣu //66//

ジナ（勝者）、ムニ（聖者）、人間の中の最高者、導師、指導者、世間の主、両足の尊い人、それから後に見える、救世者などは、仏の別の呼び方で、ここでは日月燈明如来をさす。煩わしいようだが、一つの文章の中で、「仏」を乱発するのを避けようとする修辞上の配慮があり、仏の特性を表示し、殊に韻文では韻をあわせるためには必須だったろう。のちに如来・応供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏・世尊の十号のような尊称の定型が成立する。だがそののちにもさまざまな呼び方が行なわれた。漢訳で適当に間引いたり変更しているのは、漢文の文脈中では当然の処置で、これを誤訳といったり不正確というのは当らない。しかしわたしの訳文では、できるだけ梵文に近いかたちを写すことに努めたい。

「広大」は、漢訳経典で方広、方等、大乗などと訳されるもの。「無量の教え」は、妙本では「無量義」と訳されるもので、そのため曇摩伽陀耶舎の訳した『無量義経』が『法華経』のこの言葉と結び付けられ、中国と日本の法華教学に特殊な解釈が発達することになる。

「瑠璃」を正本は「瑠璃と水精」とし、妙本は「瑠璃と頗梨」とする。現存諸梵本には、水精あるいは頗梨にあたる語は見えないようである。

1.49. 仏たちが見える、それぞれに独立自存し、黄金のユーバのように美しく、
瑠璃の台座の中央の黄金の像さながらに、会衆のなかで法を説くのを。（67）
そこの声聞は数知れず、スガタの弟子も無量だが、
かがやく光は一々の導師の国土のすべてを照らした。（68）
また見える、導師の子らが岩山の洞穴に住み、精進し、
円満の戒、清浄の戒を摩尼珠や宝玉のように護持するのが。（69）
すべての自分の財を喜捨し、忍耐の力で瞑想を楽しむ堅固な
多くのボサツ、ガンジス河の砂のような一切も、またこの光で見えたのだ。（70）
動かず、揺るがず、忍耐して、瞑想を楽しみ三昧に入る、
スガタの実の子らが見える、瞑想により無上道へと進むのが、（71）
真実の言葉の、静かで汚れのないものを、よく知り明きらめ、
多くの世界で法を説くのが。これらみなスガタの威力のおかげだが。（72）
この四衆は、救世者、日月燈明の威力をみると、
その刹那、喜びに毛が逆立ち、たずねあう、これは一体どうしたのかと。（73）
人、天、ヤクシャに供養せられた世間の導師は、やがて三昧から立ち上がり、
語ったのだ、仏の子であり、賢明なボサツ、説法者である妙光に。（74）

「世間の眼で拠りどころなる、優れた君は、わたしの信頼すべき、法の護持者だ。
君こそわたしの証人だ、法蔵を衆生のためにいかに説くかの」（７５）
多くのボサツを奮い立たせ、喜ばせ、表彰し、讃嘆し、
説き明かした、このジナは、無上の法を、六十中劫の満ちる間に。（７６）
世間の主は、同じ座で説き続けた、最勝最妙の無上の法を。
そのすべてを護持した、ジナの子の妙光が、法師となって。（７７）

buddhāś ca dṛśyanti svayaṃ svayaṃ-bhuvaḥ suvarṇa-yūpā iva darśanīyāḥ /
vaiḍūrya-madhye va suvarṇa-bimbaṃ parṣāya madhye madhye pravadanti dharmaṃ //67//
tahi śrāvakāṇāṃ gaṇanā na vidyate te cāpramāṇāḥ sugatasya śrāvakāḥ /
ekaika-kṣetrasmi vināyakānāṃ raśmi-prabhā darśayate hi sarvān //68//
vīryair upetāś ca akhaṇḍa-śīla acchidra-śīla maṇiratna-sadṛśāḥ /
dṛśyanti putrā nara-nāyakānaṃ viharanti ye parvata-kandareṣu //69//
sarva-sva-dānāni parityajantaḥ kṣantī-balā dhyāna-ratāś ca dhīrāḥ /
bahu-bodhisattvā yatha gaṅgavālikāḥ sarve 'pi dṛśyanti tayā hi raśmyā //70//
aniñjamānāś ca avedhamānāḥ kṣantau sthitā dhyāna-ratāḥ samāhitāḥ /
dṛśyanti putrāḥ sugatasya aurasā dhyānena te prasthita agrabodhim //71//

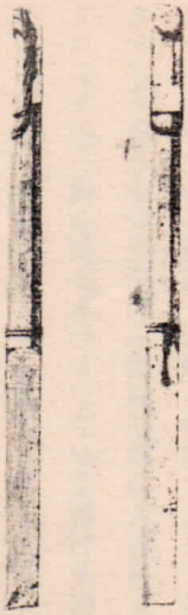
bhūtaṃ padaṃ śāntaṃ anāsravaṃ ca prajānamānāś ca prakāśayanti /
deśenti dharmaṃ bahu-lokadhātuṣu sugatānubhāvād iyam īdṛśī kriyā //72//

この仏たちは、日月光明如来の白毫、眉間の巻き毛、から放たれた光に、照らし出された仏たちである。「自存」と訳した svayambhū は、もとバラモン教で、それ自身で存在する世界創造神とされたマヘーシュヴァラをさし、仏教では、師なしにひとりで覚りを開いた釈尊を、ひいては仏一般、さらには独覚を、さすようになった。仏はそれぞれの仏国をもち、それぞれの仏国は特有の時間をもつとされ、仏も仏国も独立自存しながらたがいに融通無礙である、とされる。

「黄金のユーパ」とした suvarṇa-yūpa を、正本は訳さず、妙本は「金山」とし、天台大師の『法華文句』はこれを注釈しない。近代の南条文雄氏らの『梵漢対照新訳法華経』には「金色」、川口慧海氏の『梵蔵伝訳法華経』には「黄金」と、suvarṇa に対する訳語はあるが、yūpa に対する訳語は見えない。岩本裕氏訳にいたって「黄金の柱」とするが、注はなく、松濤誠廉氏らの訳は「（供犠のための）金の柱」とし、かなりわかるようになったが、そんな柱がなぜここに出てくるのかは理解しにくい。

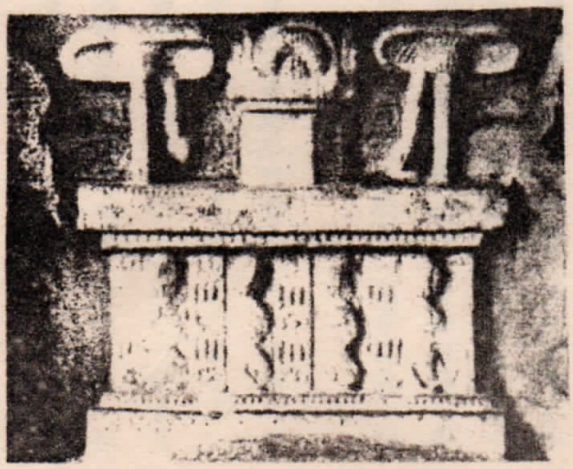
モニエルの『梵英辞典』によると、ユーパは、犠牲獣をくくりつける柱で、普通は竹、またはカーディラというアカシヤの一種を使うという。やがて勝利を記念する直柱をもいうようになる。

ちかごろ出た中村元氏の『図説仏教語大辞典』には、「祭柱」と「ユーパ」の項に説明があり、写真が入り、「ストゥーパ」や「堵婆」の項を参照すると、ほぼ理解しうる。以下は、その説明。



「祭柱」ヴェーダ聖典にはもろもろの神に対して祭祠を実行するように記されており、その規定に従って犠牲が捧げられた。祭祠に用いる犠牲の動物をつないでおいた柱を祭柱という。上図は、マトゥラーのちかくのイーサーブルで発見された左右の祭柱（二世紀）

「ユーパ」ヴェーダの祭祀では祭柱をいう。仏教では、ストゥーパの上にあって harmikā に囲まれた中に立っている柱をいう。それが傘蓋を支えている。下図はユーパ。

さて、下図の、茸のように見える二本の傘蓋にはさまれたものがユーパだが、これでは『法華経』の、いま出てきている「ユーパ」にはぴったりしない。ところが、ストゥーパ、すなわち塔の説明を読み、その形式の発展を、挿図や写真によって追って行くと、日本で塔というところのものの基壇をのぞいた、上の部分の全体が、ここの「ユーパ」なる語でしめそうとするものに当るように思われる。

バラモン教徒の祭の犠牲柱のようなものがなぜ仏教徒の塔の主要部をさす語に転用されたか。いつ、なぜ、どうしてなど、問題が少なくない。